海は私たちの敵なのか味方なのか
～自然災害について考える～

八戸学院大学　地域共創学部　地域共創学科
宮崎にいな　澤目亜希乃　橋本美月

調査協力機関

- 八戸市役所
- 八戸学院光星高等学校
- 八戸市立鮫中学校

アンケート結果はこちら 👉🏻

研究目的

本研究では、八戸の海や自然環境、防災に関する意識を調査し、中学生・高校生・一般市民の意識の違いを明らかにすることを目的とする。
調査結果をもとに、自然環境と防災の関係について理解を深め、自然と共生しながら災害に備えるために、私たちにできることを考察する。

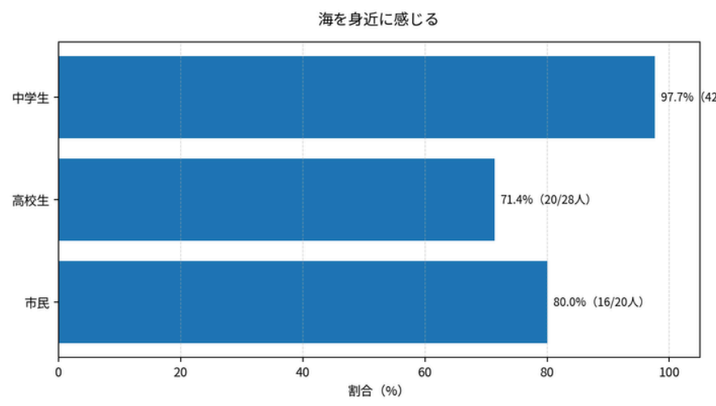




アンケート調査

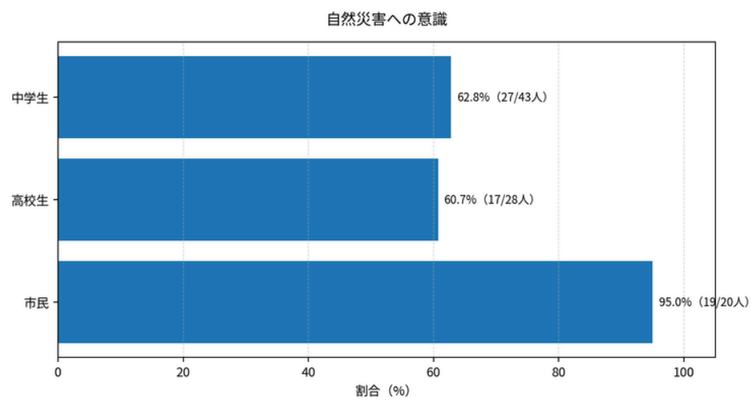
八戸の海・自然環境・防災に関する意識を把握するため、中学生43名、高校生29名、一般市民20名の計92名を対象にアンケート調査を実施した。海を身近に感じるか、自然災害への意識、自然環境と防災の関係などについて質問し、回答結果を3つのグループで比較・分析した。

アンケート結果



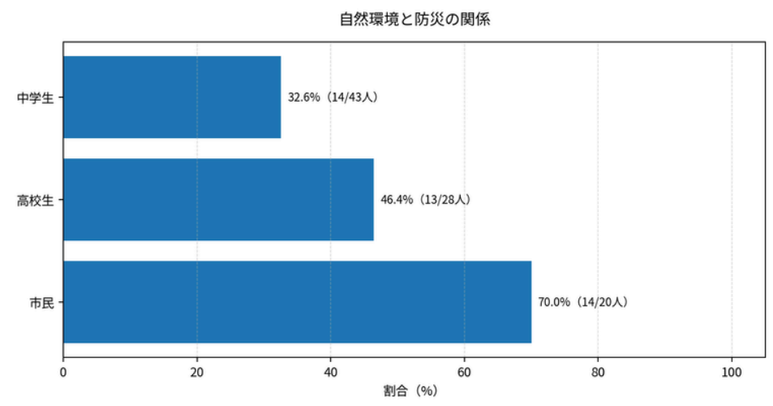
海を「とても・少し身近に感じる」。単一回答は有効回答数を分母。

中学生は海を身近に感じる割合が最も高く、八戸の海が身近な存在であることがうかがえる。



津波などの災害を「よく・たまに意識する」。単一回答は有効回答数を分母。

市民は災害の可能性を意識する割合が高い一方、中学生・高校生では約6割である。



自然環境が災害防止に「とても・少し役立つ」と考える。単一回答は有効回答数を分母。

自然環境が災害防止に役立つと考える割合は、市民で最も高くなっています。自然環境の保全と防災のつながりを学ぶ機会が重要だと考えられる。

アンケート結果から見えてきたこと

中学生や高校生は被災経験がない、または少ないため災害に対する防災意識が全体的に低め。
また、避難場所の把握もあまりしていない傾向がある。

それに対して、大人は被災経験が子供よりも多い人がいるため、防災意識が全体的に高い。そして、避難場所の把握をしている人も多い。



自然と共生し、災害に備えるために私たちにできること

2026年9月21日、六戸町で第1回「ろくのへ防災フェスティバル2026」が開催され、
私たちも出展者として参加した。

このような防災イベントは、防災意識を高め、災害への備えについて学ぶ良い機会となる。
また、イベントへの参加や出展を通して得た経験や知識を家族や友人、地域の人々に伝えることで、地域全体の防災意識の向上にもつながる。

自然と共生しながら災害に備えるためには、防災イベントに積極的に参加・出展し、得た知識や経験を周囲の人々と共有するとともに、一人ひとりが日頃から防災について考え、行動することが重要である。

まとめ

今回の調査から、八戸の海は地域の身近な自然として親しまれている一方、津波などの自然災害への意識や、自然環境と防災の関係に対する理解には違いが見られた。

地域の自然を守ることと、災害に備えることは、どちらも安全で豊かな暮らしにつながる。

海の魅力を次の世代に残すためにも、自然環境について学び、避難場所の確認や防災情報の収集など、身近な行動につなげることが大切である

「学ぶ → 周囲に伝える → 地域全体の防災意識を高める」

参考文献

- 六戸町公式ウェブサイト「災害時の外国人支援に関するセミナー開催のお知らせ」
  https://www.town.rokunohe.aomori.jp/docs/2026090900042/
- 公益財団法人B&G財団「青森県六戸町　県内2ヵ所目の防災拠点が完成」
  https://www.bgf.or.jp/info/rokunohe-20261001/
- とわこみゅ「ろくのへ防災フェスティバル2026」
  https://towakomyu.com/events/rokunohe-bousai-festival/

（最終閲覧日：2026年9月3日）